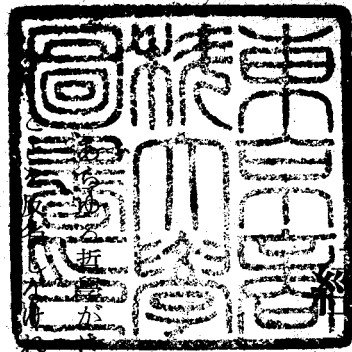


「經濟哲學」序論

本 多 謙 三



總括的考究者に委せてよいやうである、經濟哲學もまた何よりも先に、自らが何を意味するか、といふのであるかのやうに思へる。一方で哲學的思索を修めてそれを經濟現象に適用すること、哲學の經濟への應用、そのやうな應用哲學の一つとして經濟哲學もまた成立する、と考へられるのが普通である。

——私はこの論文を教科書的な序列に従て一般的な事柄の定義的な説述を以て始めようとは思はず、考察に上つてくる諸問題をその生れてくる自らの状態と位列に於て取扱はうとするが故に、又經濟哲學といふやうな未だ一度も概観されたことのない幼い學問にあつてはさうすることが材料を整理し系統だてる唯一の方途であると信するが故に、右のやうな通俗な見解に對する論難を以て思索を始めようと思ふ。

もし經濟哲學がそのやうな應用哲學の一つに過ぎないならば、私、のみならず多少ともに哲學的思索に徹しようと欲する者はかかる値少く努力を要しない仕事に與ることを快く感じないであらう。純粹な學問の法則を實地に應用する技術家、規範や法規や慣習を事例に對して按配する實務家、彼等の法規や規範に對する興味と、法則や規範それ自らの根柢を見究めようとする者の關心とは自ら異らなければならぬからである。經濟哲學は技術家や實務家の仕事に相應しいといふことはできない。藉りものの哲學、縁の薄い客人を經濟の領域の中へ招いてくるのではない、寧ろ經濟現象が哲學そのものに對して他の道途に於ては達し得られなかつた視角と轉向と仰望を與へてこそ經濟哲學もその哲學の名に値するといふことができる。そして經濟哲學はこの役目を果しつつある、と少くとも私には思へるのである。經濟現象の深い純粹な考察が經驗科學の認識論に及した大きな刺戟とそれに依て開拓された新しい視野をみよ！ 更に歴史生活そのものの解釋に對して一轉向を與へた唯物史觀も實は經濟現象の變移の獨特なる考察がその基底を有することを思ひ起せ！ 世界存在の解釋、生活の指針、これらの從來哲學の課題として掲げられた事項も、來りつつある時代に應ぜんがためには全て經濟哲學の問題とし來り又しようとする方向に於て解決されなければならぬのであらう。もしこのやうな大任を自覺しない「經濟哲學」があつたとしたらそれは惡しき意味で應用哲學であり、元來の哲學の名を僭してゐるに過ぎない。經濟哲學は決して哲學の經濟的領域への適用であつてはならない。それは

かりではなく自然に關する哲學を除いて、抑々生活の内に指示されてゐる諸々の課題——經濟、法律、政治、藝術、宗教などを離れて空漠とした哲學といふやうなものが存するのであらうかといふことが疑問になる。ぼんやりと哲學と稱するのは唯單に學問といふのと等しいであらう。勿論人智が宗教や詩情からやつと離れ得た時代にあつては哲學の名があらゆる學問を總括するに相應しいやうに思へる。所が次第に哲學自身の問題も分化してくると共に、遂に近世の初に於て故意に形而上學的思辨に對抗しようといふ學問が樹立された。最初は自然に就て、舒々に人間や人間の社會歴史に就てまでそのやうな傾向は瀾漫した。哲學はこれらの新興の科學にその場所を譲つたかのやうにみえた。所が經驗科學はその發達の道程に於て常にその視角に餘る部分を有つて居る、それは丁度その科學の背光のやうに一つの領域を包んで居る。哲學はこの徹に擴がる背光を自己の仕事場として受持つた、そして最早このやうな背光、剩餘面のない處には哲學もまた存しようがない、哲學が一つの領域全體を支へて居るやうに思へるのも單にそのためである。自然を取り圍むものは自然を以て盡し得ない人間の歴史生活といふやうなものであり、これは又單なる歴史生活の原理で支配し得ない一層包括的な自らなる生成或は存在に依つて包まれてゐることも豫想し得る。それはとにかく哲學がこのやうな性質である以上、それは何等かの領域に結付かなければならない、そして丁度その支持者であるやうな背後の場面を探る。諸々の經驗科學の基礎附けをなすといふ認識論の仕事、認識そのものもその根柢に於て生へ

の連關を有つことを示さうとする立場、更に有限なることを特色とする生が時間を絶したものに與ることを説く見地、夫々ある領域の背面を探らうする哲學の努力に他ならない。この内最後の境地だけは容易に經驗科學の對象となるほど明確に規定され得ないやうにみえる。それ故、哲學が常に窮極の逃避場としてこの境を選び又ここからいつも處女地開拓の道具を藉りてくるのも當然である。しかもこの境地もまた宗教といふ人間生活の一課題に過ぎないのである。このやうに哲學がその對象、こゝでは生活、と切り離し得ないものであり、その問題の解決の仕方各々の領域に就て異なるものであるとすれば經濟哲學を以て一つの應用哲學だとする考は益々首肯し得ないことになる。經濟哲學の重要さは當にその反對を教へることにあつたし又なければならぬのである。

このことを覺るには經濟とは何であるかに就て知らなければならぬ。經濟とは何かといふ問ひは一見經濟科學といふ經驗科學の一つに依て答へられ得るやうであるが、その期待は直ちに裏切られた。經濟科學は全ての經驗科學と同様に經濟現象を既に經驗的に與へられたものとして取扱ふ。たとへ經濟的とは何かに就て定義的解説を示すにしても、それはその後の論述を圓滑にし理解し易からしめるといふ便宜上の約束の域を出ること遠くない。定義は本質に觸れず根源を探らうとしない。經驗科學の必要からはそれで充分であらう。しかし向に述べたやうに、ある領域はもはやその領分には屬しないが而もこれに境を接してゐる背後の地域をもつてゐる。そして隱密なあなたに擴つてゐるこの背後

地は明確に浮び上つてゐる部面を包み又支へてゐるやうにみえる。哲學はこの隠れた地域に就て現れた部分の全體を支持する本質的なものを探らうとする。經濟的領域に對しても事情は同じである。經濟的領域を經濟的たらしむる本質性はこの領域の内部に於ては求めることができず、それを包む隣接界に於て見出されるのでなければならない。即ちとりもなほさず經驗科學としての經濟科學の對象ではなく經濟哲學に依て見透さるべきである。經濟哲學は先づ哲學に就て意見を決定すると同時に經濟とは何かに就て解答を與へなければならない。けれども前もつて斷つたやうに哲學といふ學問の固定した領域があつてそこに成立する原理を専門の哲學者の成果から藉りてこられるやうな事情には面してゐないのである。經濟的領域に就て特殊の學問的態度をとることが直ちにこの境に於て哲學することに他ならない。それ故吾々はこゝで豫め經濟哲學とは何であるかを叙べるわけにはゆかない。論述の發展につれてその姿を次第に明確にしその終局に於てやつと輪郭を顯にするといふ仕方に於てのみ、この場合哲學が何を意味したかが判明するのであらう。そしてその出發點こそ——又その窮極點もさうであるが——「經濟とは何であるか」といふ問ひに他ならぬ。

けれども實はこの問ひもまた率直に答へ得るやうな性質のものではない、やはり漸を追てその真相を傳へるより外はない。とはいへ豫め最小限に於てでもその内容もしくはその特徴を規定しておくことが必要である。この意味で私は暫く經濟とは生活の一つであると斷定しようと思ふ。經濟が生活の

一つであるといふのは、それが生活それ自らが包含する課題の一つであること、生活の一方の方向であることとを意味するに他ならない。生活の示す秩序、連關は夫々の課題に依て統一され貫かれてゐる。それらは丁度各々の課題自身の規定であるやうにさへ思へる。經濟もまたこのやうな生活の連關の内に自らを示してゐる。こゝに於て問題は生活とは何かといふ方向に轉ぜられる。この生活とは何かといふ課題を釋くものは何であらうか。もし單純なる思索を以てこれを解き去るならば折角生活として規定したものを再び生活ならざるもの、單なる觀念といふやうなものに戻すことである。吾々は一度經濟を生活と斷定した以上これをまた生活でないものと定めることはできない。さうしたいために吾々はディルタイのやうに生活を生活に即して理解する立場に立たなければならぬ。生活をその外から移し來たつた原理に基いて作り上げながら説述するのではなく、生活そのものゝ構造に應じて自らを顯にさせる工夫をしなければならぬ。經濟生活に就ても關係は同じである。唯多少重複してゐる、といふのはこの際には生活に依て生活を理解するばかりでなく、經濟生活に依て經濟生活を釋くことが必要である。即ち生活の内部に於ても經濟的なものは他の生活の方向、例へば政治的なもの、法律的なもの、倫理的なもの等々に從て解されてはならないからである。經濟的なものは又經濟的なものに依てときあかさされねばならない。尤も同じく生活である諸々の課題が各々の範圍の封鎖的な連關を越へて領域同士の連關を示すやうな場合があつても、それが一定の生活方向に結びついてゐる

る以上その課題を通して理解さるべきであつてそれと取り離すことはできない。生活は生活を明にする、經濟生活は經濟生活に依て顯となる。この命題は單なる同語反覆ではない。これまで經濟生活以外の原理を以てこの本質と意味とを説き明かさうとした多くの誤つた試み——生活と離れた思辨に依て經濟生活の幻影を組立てようとする要求、經濟生活を倫理的生活の構造を以て推し測らうとする企て、經濟生活を法律生活を以て規整しようとの提案、これらは全てこの簡単な命題を顧みない點に由來してゐる。吾々はこれらの轍を踏まないために明つきりとこの事情を意識しておく必要がある。

さて經濟生活は自ら自らを理解するのであるが、この自らに依て自らを理解するといふ特性は生活のうち根ざしてゐるのであつてその一定の方向、課題の一つである經濟に存するのではない。寧ろ何が經濟であるか、生活を經濟的たらしむるものは何であるかは廣く生活一般の底から浮ひ上つてくるものである。經濟的特性は經濟からではなく生活から理解されなければならない。生活のうち自ら經濟的なるものゝ方向が定められる。それ故經濟的なるものは生活を生活に基いて理解する立場に於て自ら規定される。向に經濟は生活であるといふ斷定を經濟の最小限の内容として必要とすると言つたのもこれに由つてである。今や最小限の限定は最大の内容を生みだすべき可能性を藏することが明になつた。經濟的なるものの全身をみようとするにはこれで足りる。吾々は生活に於て經濟的なるものの構造をありのまゝに覺る。經濟といふ生活ではなく生活の内に横る經濟的なるものが關心の中

心を占めることになる。然らば經濟的なるものは如何なる状態に於て生活の内に横るのであるか。

如何なる生活もそれを直接體得し得ることを特徴とする。何故とも知れず人を行動にまで衝しやる力、意志、それへの反撥、鬭争、勞働、欲求と充足——これらの束の間も吾等を離れない關心こそ生活そのものである。經濟生活もまたかかる根本の力に動因を供せられ秩序を支配される。原始的な生産行為、交換といふやうな現象から資本の遞増的蓄積、貨幣の發達、生産技術の進歩、流通組織の微細な構成、これらの全てを色づける身分や階級の利害の交錯と對立、遂にはその緊張、衝突、爆發、何れも生活の内面的力の現れでないものはない。さうしてみると生活の真相を理解するには生活を生活するより他に途がないやうに思はれる。經濟生活を身に體現して、例へば直接企業を經營するとか、少くとも財産の増殖を目指すとか、或はこれらの目的を達する條件を缺くが故に自ら勞働力を賣つて生命を維持するとか、どのやうにか經濟生活の行程に參與することによつてのみ經濟生活そのもの、本質も見究め得るやうである。他人の生活を通じて多くは書物の上で經濟生活を窺はうとする學者の企ては、たとへ統計などの手段に依て實生活への連絡を失ふまいとしても、根底に於て當を得た態度といふことはできない。その上自ら經濟生活に與ることの薄いのには勿論、經驗科學者のやうに實情への關心をも持つこと少くそれでも仍「經濟とは何か」に答へ得ると自負する哲學の學徒は妄想に向て獨り強がれるセルヴァンテスの騎士にも比せらるべきであらう。そして吾々は實務家にして同時に偉大

なる經濟學者であつた人々の例をも決してもつてゐないのではない。しかし多くの實際的經濟上の行為者に就て全く反對のことが言ひ得ることを注意しなければならぬ。彼等は目前の彼等の利害關係をみるのに敏くてそれに囚れその色眼鏡を通じてのみしか經濟生活の動きをも判じ得ないやうである。彼等自身の利益の追究と増進とが何よりも先に彼等が關心とする所である、この關心が彼等の一切の行動ばかりでなく、經濟生活に對する彼等の理解をも支配する。このことは唯、現今の經濟生活の運用者である企業者や資本家や技術者に當れるのみならず、その人々に統制され又陰ながら對立せる所の勞働力の販賣者、無産勞働者達にも適應する。この人々は現存の經濟生活が彼等の生活を脅威し遂には廢滅に齎すべきものであることを覺り、どうかしてこの運命を免れ、等しく豊かな生活を享受できる状態に憧れ、これに向つて突進する。そしてこの人々の眞の生活はこの闘ひにこそ横つてゐるやうにさへ思へる。しかし彼等とても時々氣分と單なる憧憬に依て行動するならばそれはエンゲルスの所謂「誤れる意識」に支配されるに他なるまい。經濟生活の如實な行手はそのやうな態度では見透し得ないであらう。經濟生活の支配者は自らの利益に眩まされて自らの立つてゐる地盤さへ明確にすることができず、その下積となれる者は壓抑と無力とに狂氣にさせられて自己の歩むべき進路を見失つてゐる。餘りに生活に近き者は當にその近迫性の故に生活の理解への正しい態度を忘れてゐるといふことができる。かういふ事情の下に生活が生活自らを理解するに際して學問が缺くことのできな

い役目を果すことになる。かくて學問もまた生活の異端者としてではなく、生活への係りあるものとして生活の連關に編込まれることになる。

經濟生活に就て經濟生活の自己理解の現れとして最初に存在するのは經驗科學としての經濟科學である。生活はそれ自身では、ある一派の人々の唱へるやうに混沌とした素材に過ぎないものではない。その内に既に種々な發展の方向と顯現の秩序とを持つてゐる、それらは決して思考が把握に際して統一の便宜のために移し置いたのではない。寧ろ思惟は生活の内部にある區部と序列とを明るみへだし、又一度顯になつた姿を生活のかつてあつた状態として寫しとりこれを把持し輪郭づける、そればかりではなく最早刻々に遷りゆく流轉の相に於てでなく一定の配置にある生活をいつでも認め得るやうな形に置き代へる。生活を言語に表すことがかやうにして可能となる。言語は直觀を伴はない單なる記號ではなく、何ものかを表現してゐる、而もそれは對象的意義といふ如きものを指示するに止らないで生活自身を表現する。尤も生活は直接には言語にまで顯現しないやうである。例へば經濟生活は經濟科學の内に把握される前に、經濟生活に直接關係する所の種々の事物、農工の道具、機械、工場、交通機關、金融制度、保險や倉庫、商舖、そして最後に貨幣に依て豫め表現されるやうである。そこにこそ經濟生活は何ものにも介在されず自己を示してゐるといふことができよう。特に貨幣は經濟生活に與る個々の肢體を一の全體に結びつける眼に見えない連繫をまで寫しだしてゐる、普通に流通の

呼行程とばれてゐる經濟生活の全面がこれに依て遺りなく表示されてゐるかのやうに思へる。經濟生活は貨幣を生みだすことに依て他の生活から分岐し獨持なる方向に自己を規定し自らを自らの仕方に於て把握し表現したやうである。しかし生活の自己理解はこれを以て終結するのであらうか。向に經濟生活の理解はそれが一の生活であるといふ點からなさるべきであつて、それが經濟的であるといふことに基くのではないと述べた。經濟的なるものは經濟的なるものを通じて表現されるがそれは直ちにこの生活を理解することにはならない。經濟生活は元來の表現組織、把握體系に寫しだされ、置き代へられて却て自己を明確にする。このやうに生活が自らを投影する所の鏡、自らを描出する所の畫面となるものが思考の編みだす表現の連關である。生活は生活されるばかりでなく自己を表現するといふ特性をもつてゐる。生活に關する經驗科學はかかる意味で生活の表現である。經濟科學もまたそのやうな性質を具ふことに變りはない。そして經濟科學が經濟生活を寫しだす際に經濟生活内部の經濟的なる表現關係を無視することができず寧ろそれをそのままに寫しとらうとする、このことは經濟科學の内部に於て貨幣といふ觀念が占める重要な位置を顧みれば直ちに首肯できるであらう。

しかし生活の自己理解はこれに盡さるのではない。經濟科學は生活を表示するには相違ないが、既に斷つたやうに生活が現在もつ區分と秩序を分明にしそれがかつてあつた姿を輪郭づけるものに過ぎない。所が生活それ自身は尙無視することのできない部面を持つてゐる。而もその部面は生活そのも

のにとつても可能なる仕方にてしか含れてゐないにも拘らず生活の生活たる所以は寧ろこゝに匿されてゐるとも看做されるのである。吾々は既に生活が意志の葛藤、勞働と鬭争の内にその本來の面目を示すことを知つてゐる。葛藤が調和され、意欲が十全に充たされ、争が鎮靜され、無爲と安逸が支配する所には生活はない。生活の序列は自然のそのやうに回歸し循環するものではない、飽くまで對立物を征服し支配しなければやまない所の意志の秩序である。生活を對象的に把握しようとする經驗科學は生活の鬭ひの跡を寫しとりその活動を偲ぶか或ひはせい／＼現に働きつゝある生活をその一點に於て切斷してそこに示される秩序を分明にし得るに過ぎない。そこには生活を生活たらしむる動因が表現しきれず餘されてゐる。生活に關する經驗科學が自己の範圍に包みおほし得ず却て自己がそれへ取り容れられるやうな背面をもつてゐるのもこゝに原因するのであらう。この經驗科學の表現に取り遺された生活の剩餘面、而も生活の生活性を藏する部分に對して理解を進めるものは哲學である。哲學は現存する生活や嘗て在つた生活を表現しようといふのではないから經驗科學のやうに寫し取るべき對象を持つてゐない。もはや區分や秩序を明にし定つた輪郭と配置に於て事物をみようとする態度に於ては何ごとく捉へることができない。さうではなく生活を包む雰囲気や味ひ生活の動きを匂ぎだすのでなければならぬ、生活は表面では窺へない深さを持つてゐるであらう、見透すことのできない擴りを有してゐるであらう。生活の陰影と濃淡と色合と音調とを味得すると同時に生活のもつ大

きな力を感受するものでなければならぬ。その結果は宛も哲學が生活を指導するのでもあるかの如き外観をもつに至るが、やはり生活に異端なるものが生活を規定するのではなく生活が自らを知る一つの方法に過ぎない。生活は哲學に於て可能なる自己を知ることが出来る。それ故哲學の理解は生活の表現といふことではなく生活をその生活性に於て把握することである。

生活の自己理解は經驗科學を通じて哲學に至ることに依つて終結するやうである。生活は經驗科學の内に現在に及ぶまでの自己の姿を寫しだし、哲學に於て自己のあり得べき状態を暗示する。生活の全面がこれに依て窺れる。この場合吾々にとつて重要なのは生活は直ちに生活する内に理解しつくし得ないと共に又直接哲學に結びつくことができないといふ事柄である。その間に必ず經驗科學が介在する要がある。生活はこれに依てその主觀性を脱して何人にも把握される状態に於て横ることになる。個々人の生活はもはや各人の生活ではなく主觀的行爲と切り離された成果となる。生活が表現されるといふことは一面に於てそれが客觀化されることである。哲學の理解は心理學の分析のやうに直接個人の生活道程に面することはできない。ディルタイは從來の説明的・總合的心理學に對して記述的・分析的心理學を主張し後者こそ人間のあるがまゝの生活の心理を描寫し得るものであるとし特に詩人の想像力に就てこの方法を適用しそこから生活の理解にとつて極めて大切な幾多の記述的規定を見出した。そればかりではなく普遍的な心理的性質とその規則的連繫とを究める一般的心理學に對し個人

の生活経験を偽らず記録した傳記、特に自叙傳といふやうなものに生活研究の恰好な手懸りを求めようとして、これを「内容心理学」Inhaltspsychologie 或は「實存心理学」Realpsychologie 「人間の學」Anthropologie などと稱して居る。このやうな心理学は或は數學が諸々の自然科学に對すると同じ位置を生活に關する諸々の學問に對して占めるであらう。それ故に後の部類の學問は精神科學の名を以て呼ばれてきたのである。しかしこの種の心理学を以て凡ゆる生活の學問に代へるわけにはゆかない。數學的方法に基く物理学であつて初めて科學的な物理学と稱し得ると等しく精神科學の方法は生活の學問の科學性を條件づけるとも考へ得る。吾々はその吟味は後の節に譲らうと思ふが、とにかく哲學は記述的心理学若しくは内容心理学そのものを生活の表現と看做して理解の手懸りとするわけにはゆかない。こゝに生活のもつ課題の特殊性、方向が無視することのできない役割を演ずる。生活は單純に生活ではなく多岐な方角をもつてゐる。そして經驗科學は生活を全般的にはなく各々の方向に従て表現する。生活に就ての經驗科學の分岐、その哲學の多様もここに由來する。それ故經濟哲學もまた經濟心理学と適當に呼ばれ得るやうな經濟生活の心理的連關の探究に出發することはできず、さりとて經濟生活を直接思辨的に作り上げることがは尙更できないのであるから、どうしても經濟科學に據り所を求めなければならぬ。

勿論生活は歴史性をもつてゐる。このことは既に生活の自己理解の連關に於ても示されてゐる。生

活することは現在に於てより外なされ得ない、かかる現在の生活行爲が經驗科學の體系に於て嘗てあつた生活として表現される。哲學に於ては生活はその生活性に於て即ち來るべきものへの進展として理解される。行爲に依て規定されてゐた生活が遂に行爲を指導する生活となる。生活が生活自身を動す。このやうに生活の自己理解は時間性の圖式に於て行はれる。そしてこの場合、理解はまた生活自身なのであるからそれが時間性を示すことは生活自身がかゝる性格を具ふることを意味するに他ならない。人間の歴史もまた生活に根ざすかかる時間性に規定されてゐる。歴史が人間の自己理解の如くみえるのもこれによるのであらう。それ故經驗科學も哲學も歴史性を具有する。吾々もまた現在に於ける經濟科學に結びつくより外に途がないのであるが、現在の經濟科學は既往のそれに連らなつてゐる、學說史上の末端としか解し得ない。經濟科學は一方に於て生活から來る實際的な要求と他方に於て生産や流通の過程を一貫した原理を以て説明しようといふ理論的な要望とが相倚つて成立し發達してきた経路に顧みて、これら二つの契機のどちらかが重みを得るに従て又これらの要素の合成をどう解釋するかに應じて種々なる傾向と流派を形成した。マアカンチリズムとフィデオクラット、正統學派と歴史學派との對立、更に資本主義經濟學とマルクス主義經濟科學との葛藤——これらの諸傾向が歴史の潮流を通して現在にまで及びなほ細な色分けを可能にしてゐる。かういふわけで現在に於て唯一つの經濟科學を求めることは不可能である。流派を異にする經濟科學の間には精密なる自然科學

に於けるやうに單なる叙述の言表しや説明の適否に關しての差異ではなく經濟そのものゝ把握に就て根本的見解の喰ひ違ひが支配してゐるやうである。それ故に經濟哲學は自然や數理の哲學が一定の内容と形とを具へた科學に結びついてその背後の境を採つて自然の本質にまでわけ入り得るやうな便宜を有しない。しかし却てそれ故にこそ經濟といふ領域が哲學に對して密接な關係をもち、そこから期待する所が多いのだとも考へられる。といふのは經濟科學はそれが科學性を要求する限り既に研究の最初に於て哲學的反省を必要とするやうに思へるからである。經濟生活の表現は認識の實際に當つてはさう容易なことではない。經濟生活はいつも生活全體の内に他の諸々の生活方向と緊密に入り組んで横つてゐる。先づそこから經濟生活を解きほごす工夫が必要である。といつて單純に經濟的領域を抽象することは不可能である、それは絶えず生活全體から影響を受けてゐる。かく生活全體からの抽離とそれへの近接との按配を適切に行ふには經濟生活が示す生活方向の特性と生活そのものゝ本質的把握とを缺くことができない。とりもなほさず經濟とは何であるか、生活の生活性に於ける理解——即ち哲學を豫想しなければならぬ。哲學は經驗科學を理解の手懸りとして必要としたが、後者はまた前者を表現の手引として要求する。生活の自己理解が決して一方的に進むものでなく一つの連關として相互に制し合つてゐるものであることが判る。生活の科學はそれが生活の自己理解の連關に編み込まれてゐるといふことから當然に哲學的理解に無關係であることはできないのである。してみると

經濟の哲學が現在の經濟科學に結びつかなければならぬといふ意味は自然の哲學が精密自然科學に頼るといふことは異るといふことが自ら明になる。經濟科學はそれ自ら哲學を豫想する、寧ろ要求する。多岐多様な經濟科學の試に統制を與へ歸趣を示すのは經濟生活の哲學を舍いて他にないやうである。従て經濟哲學は經濟科學の訴へきたつた種々なる惱みを聞き入れることに依つて自己の問題をも定め得るかに思へる。表現の苦しみは生活の深みと力とを示してゐる、哲學はこの表現しきれない生活の根柢へ突き入らうとする。經濟科學の苦惱は先づ經濟生活を如何に寫しださうかといふことに存在する。經濟科學の方法論に關する論議がそれに當る。この階段に於ては議論の内容は表現の技術に關することが多く或は抽象的・演繹的方法によるべきかとか或は記述的・統計的手段によるべきかといふことが検討されるのであつて、本來の哲學に觸れることは極めて薄い。所が方法の争が之の科學の知識そのもの、成立の根據とその特性とを究める認識論的研究を呼び起すに至つて經濟科學は一段と哲學に近づいたやうである。現代に於ける經濟哲學上の企てが殆んど全てここに出發點を求めてゐるのもそれに依るのであらう。シュタムラアやシュトルツマンはこの場合新カント派の一派であるマアルブルク學派に結付いた。そしてデイールの説くやうな社會的・法律的とも名づけられる經濟科學上の流派を生みだした。左右田博士やまたシュテフィンガアといふやうな人々は等しく新カント派に屬するが、主として西南學派の文化科學の概念構成の議論に據つて經濟科學を批評した。そして左右

田博士は獨特の極限概念の哲學に基いて總括的な文化哲學の樹立を志すに至つた。博士の思想の内に又ジムメルの藝術的に透徹した歴史觀・文化觀の少からざる影響が認められる。ジムメルは決して單なる認識論を以ては満足しない、常に認識の問題をも廣く生そのものと係らしめないではゐられない。そこに經濟哲學の一層廣濶な展望が與へられてゐることは争ふことができない。しかしそれは餘りに直觀的・藝術的であつて、生活そのものをむら氣な斷片に化してしまふ。ジムメルの個人的好みに依つて經驗科學のぢみちな道程が置き代へられてゐる。それは刺戟と暗示とに富むでゐても到底根據ある哲學的理解だとは言ひ得ない。ジムメルの良き影響は却て社會學の方面に於てあつたやうである。彼の見解に基いて歴史哲學的・百科全書の社會學に對して形式社會學が樹立された。そしてそれは再び經濟科學の上に影響しつつある。この點に就てはまたマックス・ウェーバーの名を逸することはできない。彼は多方面な人材であるが唯、本來の哲學に手を染めることを好まない。認識論の如きも専門哲學者の仕事としてその成果を利用するに止る。彼には實在的生活の把握が何よりも關心事のやうにみえる。この際彼にとつて歴史的研究がその目的に相應しいものとして選ばれる。ここに於て生活の歴史を捉へる工夫が考案され、歴史の實際的研究の方法として一種の普遍的概念が必要であることが明にされ、その普遍的概念を分析しだす學問として社會學が要求される。彼に於ては宛も社會學が哲學の位置を占めるやうにさへ思える。彼によると經濟科學も經濟生活に關する社會學を構成要素

素として持つてゐなければならぬのである。寔に現代の經濟哲學の論行は經濟科學の科學的性質の吟味から社會的なるものの認識といふことに中心を移したやうに思える。經濟哲學の樹立に就て現今最も活潑に貢獻してゐるやうにみえるシュパンもまた從來の自然法的・自由主義的な個人中心の經濟觀に對して、個人を全體の一員と觀じ國民經濟を社會といふ全體の部分であり肢體であるとみる全體よりする觀方を特色とする。この場合彼は原理的にはロマンチクの亞流アダム・ミユラアを追隨し讚仰してゐる。蓋しロマンチクに於て情意の世界が再びその價値を認められると共に啓蒙時代に於て支配した個人中心の思想が覆されて再び人類全體の協同社會が憧憬されるに至つたからであらう。シュパンは經濟を以て生活の一部とみると共に精神的なものの現れであると解さうとする。詳しく言へば經濟は凡ゆる精神的なるものの忠實なる奉仕者であり、目的の世界の門としての手段の世界である。經濟は物質界と目的界を媒つものである。シュパンにとつては經濟科學が社會學や更に哲學へ境を接するのは當にこの點に於てである。やはり經濟が社會生活の全體に包攝されるといふことがその哲學的關心を占めるやうである。こゝでは社會學と並んで社會哲學の建設をも促し經濟哲學は寧ろその一部と認められる。しかし經濟生活は社會的なものに盡されるのではない。その歴史的發展を度外視することができない。既に文化科學の認識論に於て經濟科學と歴史哲學との係りが明にされたのであるが、更に實證的な歴史研究に依て經濟生活の歴史性が明にされた。この方面へ寄與した人々の内

には前掲のウエニエバアの外にトロエルチなどの名を挙げ得るであらう。これらの研究は經濟生活が如何に時代々々の觀念形態、特に宗教解釋に據つて支持されてゐるかを明にした。即ち經濟生活は歴史を通じて世界觀との關連を具體的に示された。經濟哲學は思辨的體系としてではなく如實な歴史的經過の内に暗示されてゐるかの如くである。そしてその研究の成果は昨日までの歴史哲學の基調であつた歴史的觀念論と調子を一にしてゐる。從て經濟生活は宗教や形而上學的な世界觀の統制を受けるものであつてその精神に支配されてゐると考へられる。所が歴史の理解に於てこれと丁度反對の立場を採るのがマルクスの唯物史觀に他ならない。こゝに於ては經濟生活は却て諸々の觀念形態を生みだす母胎である。しかもこの場合には經濟生活内部の組織の變移が社會全體の形態の革變をもたらすといふ歴史生活の進展に就ての一定の規則性が重要である。所謂唯物辯證法はそれを指すに他ならない。かくて經濟生活は社會生活の組織を規定するのみならずその歴史的運行の動因ともなる。それは哲學に依つて制約されるのではなく逆に哲學を決定すべき位置に立つ、そしてこのことは吾々が經濟哲學に於て要望した所と合一するのである。經濟哲學が唯物史觀の内に學ぶべき多くのことを有するのは争ひ得ない。マルクスの觀方に附くことによつて經濟哲學は單なる認識の問題から放たれるやうである。生活は表現の階段を完全に脱けてその生活性に於て理解されるやうになる。問題の中心は社會的なるものゝ認識、歴史的實在の把握といふことを離れて、社會的なるものの推移、歴史の運動、そ

の内に於ける經濟的なるものゝ位置、働きといふ方面に移される。社會の變移が物質の變化と同じやうな道程を辿るものであるか、それとも人間の實踐が變革を促進させ成就させるのか、その際、經濟生活に與る人々は如何なる役割をつとめるかといふやうなことが究められなければならない。從來要望されながら解決の緒をうるに苦んでゐた社會倫理學といふ如き學問の部門もこゝに自己の問題を發見するに難くないであらう。

かやうに經濟哲學は經濟科學の自己反省の第一歩としての方法論上の論議から、自己の學問としての性質を吟味しそれを基礎づけようとする認識論的回顧を経て、遂に經濟生活そのものゝ行手とその動力とを探らうとするに至る。經濟の哲學は經濟科學の哲學であるといふやうな外見をぬいでやはり經濟生活の哲學であることが明になる。しかし經濟生活は經濟科學を通じてしか理解され得ない。この意味に於て經濟科學の方法論や認識論を経過することは決して迂路ではなく却て必然の途でなければならぬ。そして最近に於て稍々纏つた成果を擧げ得た所の經濟科學の認識論的研究はその議論の徹底を欲する餘り、元來自己を生みだした母胎とも考へられる方法論上の反省を無用なるものと看做すに至つてゐる。この時に當つて本來の認識論を以て専門哲學者の仕事として自分は飽くまで經驗科學者としての考究の體驗を離れない方法論を説くに止めようとするマックス・ウェーバーの態度に學ぶところがなくてはならない。ゴットルといふやうな學者も形式的な認識論に飽きたらず生活の近接

を重んずるが、それは未だ概念化されない直接性を保存しようとする態度であつてやはり認識論以前に問題を求めようとするものだと思ふ。私もまた経済科學が哲學に求め委ぬべき問題はその方法的反省に於て提供せられるべきであつて哲學の側から持ちだすべきものではないと信ずるが故に、考究をこの段階から始めようと思ふ。方法論こそは經濟科學が經濟生活の表現體系としての限界を明にする最初の境である。經濟生活の自己理解はこの點から經驗科學的把握の態度を破つて哲學的理解へと進入する。私はこの經濟哲學への入口から歩を運むで方法的反省が如何に認識論に吟味と基礎づけを求めねばならぬか、そして終に認識論がどうして凡ゆる立場から離れた見地に止り得ず却て生活の連關に編み込まれて一定の生活觀に基かざるを得ないか、かかる生活觀とそこに把握される生活形態との交渉如何といふ問題にまで進みたいと思ふ。

附記 右の論文は故本多謙三君が岩波書店の囑を受けて執筆し始めた「經濟哲學」の序論である。この次に二、ミルの批評。三、シュモラーの批評。四、メンガー、ヴェーバーの批評（この章の内容は、雑誌「思想」左右田博士記念號に君が執筆せる論文と略々同一である）の稿があり、その歴史的論述の後を受けて本論が始まるらしかつたが、それは筆をつけられず、かくして君の主要著作の一つとなるべきものが一つのトルソーとして終つたことは、返す返すも残念である。病床に就き、本も讀めなくなつてから、しかしこの書の完成は始終君の念頭をはなれなかつたらしく、君はシュンペーターの著書などを若き友人に讀ませて、その梗概を書くことを依頼したといふ事である。茲に掲げられた論文は經濟哲學に對する君の立場や、延いてはその著の全體のプランヤを窺はしめるものがあり、せめて研究心旺盛なりし故人の仕事を忍ぶよすがともならば幸ひである。（吹田順助書す）